

大震災での救急活動(1995年4月号掲載)



1月17日朝、夜が明けるにつれ大地震の被害が次第に明らかになり、火災と救助を求める駆け込み通報が錯綜し混乱する最中、「トラックが湊川に転落している」との通報を受け救急車で現場へ急行すると、安全だとされていた阪神高速道路が倒壊し下り入口が道路ごと湊川へ落下しており、トラックも阪神高速とともに約5メートル下の川底に転落し運転手は運転席でぐったりしており動けない状態であった。

普段であれば救助隊も要請でき相当の人員で対応できるはずだがと思いながら、隊員に川底に降下するよう指示した。運転手を救出するとともに携帯担架に傷病者を乗せて固定した。見物していた何人かの住民の協力を得て引き上げることができた。

救急車に収容し観察すると意識はあるものの、脊髄損傷の恐れがあり重症である。病院交渉も救急車で交渉し病院へ搬送したが、病院収容後、人命を救助したという充実感は全くなく、すでに失われたであろう尊い命の数や今救助を待ち焦がれている大勢の人々のことを思うと、自分の無力さを思い知らせれるとともに、今までの大規模災害に対する認識の甘さを痛感した。しかし、今は

たとえ一人でも多くの市民を助けることが自分に課せられた責務と思い深い喪失感と闘いながら
現場へと再び救急車を走らせている。